



情熱の羅針盤

No. 4 (2023.06.01)

【中間考査、お疲れ様！～テストが終わったらコレをやる～】



5月22日から4日間に渡って実施された中間考査が終わりました。皆さんにとっては高校入学後初の大型考査ということもあり、緊張や不安の中で受験したという人も多かったかもしれませんね。本当にお疲れ様です。考査が終わってすぐにもまた通常授業を含む日常生活が再開してしましますが、「考査の振り返り」はできていますか。振り返りとは、何点を取ったとか順位が何位だったとか、そういうことではなく、問題の解き直しのことです。もちろん、ただ機械的に2回目を解くのではなく、間違えたところ、忘れていたところ、覚え切れていなかったところなど、テストを通じて浮き彫りになった自分の弱点を潰すための解き直しなのです。あるいはケアレスミスが多かった、という人も影りではないですか。後から見ると「何でこんなしょうもないミスをしてしまったんだろう」、「何で試験中には気付けなかったんだろう」と、愕然とすることもあるでしょう。その悔しさや落胆を心に刻んで、教訓にしていくための解き直しでもあります。

というわけで、まだの人は近いうちに必ずやっておきなさいよ。解き直しを週末課題にしてくれている教科もありますが、それ以外の教科・科目でもテスト後の解き直しは必須です。テスト対策 → 試験本番 → 解き直しと、ここまですべてがテスト勉強のワンセットと心得ましょう。これは学校のテストだけではなく、これから始まる模試でも同様です。

…思い返せば、中学校でも復習の大切さは何度も言われて来たと思いますが、実行できていたか。まだそういう習慣が身につかないまままっさらで来てても一たな…という自覚のある人は、1年生の今のうちに習慣にしておいてくださいよ。むしろ最初の考査が終わったばかりの今が、良い習慣をスタートさせる絶好のタイミング！ 今ならまだ間に合います。みんなの高校生活は始まったばかり。今まではできていなかった学習習慣を作っていくのも、これからです。

【学校説明会、終了～君たち全員が祥雲大使だ～】

中学生に祥雲館のことを知ってもらったための学校説明会が、5月27日（土）に行われました。生徒会のメンバーも活躍してくれましたし、1年次を代表して探究情報部のインタビューに答えてくれたのは、霧田 鈴木 鈴太郎さん（3組）と、久下 綾香さん（6組）の2名でした。お疲れ様&ありがとうございます。祥雲生として、いろいろなることを中学生に伝えてくれたと思います。

また、夏と秋にもオープンハイスクールがあります。実は学校の宣伝のために最も効果的なのは、他ならぬ皆さんの声です。実際に入学し、ここで過ごしている皆さんの声が一番リアルで、最も中学生たちに響く力を持っているのです。「祥雲館に入って良かった」とか「おすすめの高校やで！」といった声を、中学校の先生や後輩たちに届けてくれることが、最大にして最強の宣伝です。これから先も多くの中学生にとって祥雲館が「行きたい高校」であり続けるためにも、皆さんの声を届けてください。…あ、もちろん思ってもいないことを、気を遣って言う必要はないですよ（笑）。



【祥雲祭が近付いて来た！】

前号では各クラスの合唱曲を速報でお伝えしましたが、今回は指揮者と伴奏者も合わせて、再度掲載します。うーん、何だか楽しみになってきました！

- ♪ 1組 … 「僕のこと」 (Mrs.GREEN APPLE) / 伴奏：中西 柚乃さん 指揮：藤田 春陽さん
- ♪ 2組 … 「水平線」 (back number) / 伴奏：貞廣 駿斗さん、西谷 美咲さん 指揮：上田 紗波さん
- ♪ 3組 … 「正解」 (RADWIMPS) / 伴奏：藤田 琉聖さん 指揮：藤本 晃基さん
- ♪ 4組 … 「空も飛べるはず」 (スピッツ) / 伴奏：大久保 里桜さん 指揮：池永 小咲寧さん
- ♪ 5組 … 「あなたへ」 (合唱曲) / 伴奏：山本 結彩さん 指揮：小倉 匠翔さん
- ♪ 6組 … 「ありがとう」 (いきものがかり) / 伴奏：丸山 陽向さん 指揮：宮本 なお葉さん

伴奏者や指揮者は確かにクラスを支えてくれる代表者ではありませんが、良いステージを作るためにはもちろん1人ひとりの頑張りが必要です。どんなに上手い伴奏と素晴らしい指揮があっても、歌そのものがみずばらしければ、それは残念な合唱ということになってしまいます。「自分が大きな声を出せば、それだけクラスのレベルが上がるんや！」と考えて取り組んでください。伴奏、指揮、そして歌と、三者が協力してこそその合唱ですよ。もう一度言いますが、高レベルなステージを披露して、先輩方や先生方、そして保護者の皆様がビックリさせちゃいましょう！

速報：保護者の皆様

先日の保護者会では祥雲祭の1日目（6月16日（金））は公開しない旨をお伝えしましたが、社会情勢や行事の趣旨など諸々検討致しました結果、1日も保護者公開とする運びになりました。クラスでの合唱や各部活動の応援に、是非お越しくださいませ。（後日、ご案内を配布致します。）

【HONEY FMに出演してくれました！】



三田市を拠点として放送しているFMラジオ「HONEY FM」（周波数82.2MHz）。ローカルなチャネルなので地域に密着したさまざまな情報を発信してくれている局ですが、その「放課後ラジオ！」というコーナーに、22回生を代表して4名の生徒が出演してくれました。4組の大西 亜文さん、笠本 歩さん、絹和 桜さん、木村 葉月さんで、オリエンテーション合宿を振り返る話題や、祥雲祭に向けての意気込みなど話してくれました。4名の皆さん、お疲れ様でした！ 緊張もあつたかもしませんが、とてもスムーズに、しっかりと喋ることができていましたよ。

なお、4人が出演した際の様子には、HONEY FMホームページ内の「アーカイブ放送」から聞くことができます。（URL：<https://fm822.com/archives/43797>）

今回の「放課後ラジオ！」はオリエンテーション合宿の話題が主だったので、オリ合宿の探究発表で優勝した4組2班から4名に参加してもらいましたが、HONEY FMさんは地域の小・中・高校に通う生徒たちを取り上げてくださる機会も多いので、今後もお世話になることがあると思います。三田市在住の人はもちろん、隣接する市町村で聞くことができる地域もありますのでチェックしてみてください！ …ところで、DJの方の話の振り方、質問の仕方はさすがですね！ ゲストの話をしっかりと引き出しながら、その答えを膨らませるように、淀みなく質問してゆく…。あれ、結構難しいんですよね。これから「質問力」を鍛えていってほしい皆さんの参考になりそうだな、と思いつつ聞いていました。



年次回リレコーラム・「あの頃ぼくらは」第1回

今、高校生である皆さんと接している年次回の先生方も、もちろんかつては高校生だった…。その頃を振り返りながら語っていきリレコーラムを掲載します。第1回は年次主任の吉崎です。

僕の高校生活は、他の人と少し違っているかもしれない。いろいろな事情があった、生まれ育った町を離れて寮生活をしながら中学校&高校に通っていた僕は、一般の中学生・高校生ではなかなか味わえないような経験をたくさん積むことができた。ごく簡単な例を挙げれば、炊事を除く家事全般を自分でしなければならなかった。乾きやすくなる洗濯物の干し方や、制服にアイロンをかける方法など、この時期に身につけたことができた。高校卒業後も、大学時代～社会人と一人暮らしをすることになったので、そういう生活のアレコレは随分役に立ったものだ。

目に見えないことで言えば、家族に対する感謝とか、ちょっと堅苦しい言い方だが親に対する尊敬の念のようなものを抱くのも、普通の高校生よりずっと強く、早かったと思う。小学校を卒業してすぐに親元を離れたいわけだが、一緒に暮らしていた頃は全く気付いていなかった。家族の支えや、存在の大きさに気付くことになった。特に、経済的なことよりもどちらかと言えば精神的な面で、自分自身がいかにか家族に頼って生きていたかを感じ知らされた(いや、経済的にももちろん頼りまくっていたけれど、それも経験するのは大学生になってアルバイトを始めた頃からで、もう少し後のことだ)。



平たく言えば、自分は実はすごく家族に甘えていたのだと理解することができた。月並みな言い方だが、家族と離れたことで、初めて家族の大切さを知ったのである。普通なら、こういう思いは大学進学や就職のタイミングで地元を離れて、そこで初めて実感するのだろうが、僕は中学生の時に、既に実感することができた。今になって思えば、すごく良い経験だったと思う。

もちろん、寮での高校生活は良いことばかりではない。当時暮らしていた生徒寮は、控えめに言っても刑務所みたいなところだった。無機質なコンクリートの生活空間も、テレビやゲームのない生活も、厳しい上下関係も、慣れるまではめっちゃ辛かった。同い年の寮生も何人がいたが、田舎育ちでノビノビした性格だった僕は、神戸や大阪などの都会から来た同級生と会話のテンポが合わず、よくバカにされていた。

しかし、その当時は辛いとかシンドいとは思ってはいたはずなのに、後になって思えば本当にかげがえのない経験だったと分かるのだ。もしも社会人になるまで一度も実家を離れず、家族とともに過ごしていたとしたら、(もちろんそれはそれで間違いなく幸せなのだろうけれど)僕は大切なことに気付くのがもっと遅かっただろう。地元の友人とだけ過ごしていたとしたら、自分の価値観や視野は広がらなかつたかもしれない。ずっと地元で暮らしていたら、のちに「第2の故郷」と呼べるほどの場所に出会うこともなかつたかもしれない。そう考えると、あの頃は今の自分を作る大切な時間だったんだな、と思えてくるのである。

まだ12~13歳のガキんちょだった僕を遠いところへ送り出すのは、親としてもきつと決断力の要ることだっただろう。実は僕より親の方がずっと不安を感じていたんだらうな〜と今なら分かるけれど、あの時の親の決断にはとても感謝している。もしかすると「可愛い子には旅をさせよ」という言葉を胸に思い描いていたのかもしれないな…と、今更ながら想像してみたりする。

…あ、僕が可愛かつたと言いたいわけじゃないですよ？

(第1回：終わり)